様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７３０６４２

研究課題名（和文）自己愛傾向と抑うつにおける自伝的記憶の機能不全の特徴

研究課題名（英文）Dysfunctions of autobiographical memory in narcissism and depression

研究代表者
田上　恭子（TAGAMI, Kyoko）

愛知県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：８０３６１００４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主たる目的は，自己愛と抑うつという心理的障害において，自己についての記憶，すなわち自伝的記憶がどのように働いているのか，もしくは働いていないのか，その機能を明らかにすることであった。結果から，抑うつと評価過敏性の自己愛においては，共に自己の連続性や一貫性を維持するために自伝的記憶が用いられやすいという類似した特徴が認められるが，誇大性自己愛ではこの特徴は認められないことが明らかとなった。さらに，想起の視点の検討から，自己愛的脆弱性が高い場合，自己愛を傷つけるような記憶は距離をとる形で想起されることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The present study examined how autobiographical memory served three functions in narcissism and depression. Results suggest that depressed or hypersensitivity narcissistic individuals tend to remember autobiographical memories so as to maintain continuity or consistency of self, while oblivious narcissists do not. This study also indicates that highly narcissistic vulnerable individuals remember an ashamed episode adopting a distanced stance not to injure their narcissism.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理的障害　自己愛　抑うつ　自伝的記憶　機能

１．研究開始当初の背景

心理臨床場面においてクライエントは，広い意味で「自己」を語っていると考えられる。そしてクライエントの自己についての語りの多くは，自己について想起された記憶を基盤にしている(野村，2008)。この自己についての記憶は自伝的記憶と呼ばれるが，このように自伝的記憶は心理臨床に非常に密接な関連があるものであり，臨床的な関心から研究が行われることもこれまで多くみられている。中でも抑うつにおける自伝的記憶に関する研究は非常に数多く，主にその想起内容に関する特徴が示されてきた(e.g., Williams, Barnhofer, Crane, Herman, Raes, Watkins, & Dalgleish, 2007)。

近年の自伝的記憶研究においては，想起内容はもとより，その機能も注目されてきている。機能について Bluck(2003)は，方向づけ機能，自己機能，社会的機能の３つに大きくまとめており，これら３つが複合的に機能して我々の人生・生活を形づくっていると考えられる。これら機能はそれぞれ，心理療法で自己を想起することの機能と重なるところが大きいとの指摘もあり(野村，2008)，逆にいえば，心理的障害にはこれらの機能不全が関連しているということが予想される。たとえば Tagami(2008)では，抑うつにおいては方向づけ機能のひとつであるアンカー機能が十分に働いていないことが示唆されているが，心理的障害と自伝的記憶の機能との関連に関しては明らかになっていない面も多く，知見を重ね，多面的に検討することが必要であると考えられる。

昨今，注目を集めている臨床的な問題のひとつに自己愛があり，心理学的研究テーマとしての重要性が高まっているとの指摘もある(川崎・小玉，2010)。自己愛に関する心理学的な実証研究は，対人恐怖との関連や攻撃性との関連など数多く行われており，抑うつとの関連性や，最近では自己愛型抑うつに関する研究もみられるようになってきている。臨床的にも，たとえば抑うつ症状を訴え面接室に訪れるクライエントの中には，自己愛的なパーソナリティが背景にある場合も少なくないように感じられる。

臨床的にはまた，自己愛傾向を有する者における記憶の歪みはよく認められる現象であると考えられる。しかしながら，自己愛と記憶に関する実証研究は未だ数少ないという指摘もあり(e.g., Rhodewalt & Eddings, 2002)，その様相も明らかではないと考えられる。自己愛は自己の病理であるといわれるが，自己についての記憶であり，かつ心理臨床場面での語りに深く関わる自伝的記憶からその病理を捉える試みは，自己愛についてのよりよい理解や援助を行う上で必要であり，意義あることと考えられる。中でも自伝的記憶の機能，特に自己機能に着目したメカニズム検討は，有益な示唆を与えるものとなろう。

本研究では，抑うつにおける自伝的記憶の機能に関する研究をさらに発展させるとともに，自己愛傾向との類似性や相違について明確にし，さらには自己愛の病理を自伝的記憶の機能不全という点から明らかにしたいと考える。

２．研究の目的

(1) 自己愛傾向及び抑うつにおける３つの自伝的記憶の機能について，それぞれの特徴並びに両者の類似性や相違を，質問紙調査によって明らかにする。

(2) 自己愛傾向に焦点を当て，自伝的記憶の歪みを同定するとともに，自伝的記憶の自己機能不全との関連性・メカニズムについて検討する。自己機能に関しては，主観的時間的距離感と想起の視点に着目することとする。

(3) 面接における自伝的記憶の語られ方の特徴，語りにみられる自伝的記憶の機能，自己愛傾向や抑うつの高低による相違に着目して質的・力動的に様相を捉える。

以上の３点が，当初の研究目的である。

自伝的記憶の機能については，臨床心理学的立場からの研究はまだ始まったばかりであると考えられ，抑うつや自己愛との関連についてはほとんど研究が行われていない。これらの研究目的を明らかにすることで，臨床認知心理学の分野に新たな知見を提供することが可能であると考えられる。

３．研究の方法

(1) 抑うつと自己愛傾向における自伝的記憶の機能に関する研究

【対象】大学生 279 名。

【手続き】質問紙調査を行った。質問紙の構成は，a.自伝的記憶の想起，b.自伝的記憶の機能の測定，c.抑うつの測定，d.自己愛傾向の測定であった。a.では，最も印象に残ったエピソードを記述してもらい，望ましさ(7 件法)と想起の視点を尋ねた。b.では，Bluck, Alea, Habermas, & Rubin(2005)による TALE (Thinking About Life Experiences)を日本語訳した 28 項目を用い，6 件法で尋ねた。加えて，Bluck et al.(2005)にならい，人生を振り返る頻度と人生の出来事を他者に話す頻度の２項目について６件法で尋ねた。c.ではベック抑うつ質問票(BDI-Ⅱ; Beck et al. 小嶋・古川 2003)，d.では中山・中谷(2006)による尺度を用いた。

(2) 自己愛傾向の違いと自伝的記憶の機能に関する研究

【対象と手続き】大学生 279 名を対象とした(1)の質問紙調査研究について，自己愛傾向の２つのタイプの違いに焦点を当て，分析を行った。

(3) 抑うつ及び自己愛傾向と自伝的記憶の想起の視点との関連に関する研究

【対象】大学生 119 名。

【手続き】質問紙調査を行った。調査内容は，印象に残っている個人的出来事の想起とその出来事を経験した年齢，望ましさ(7 件法)，想起の視点，BDI-Ⅱによる抑うつ測定，及び中山・中谷(2006)の尺度を用いた自己愛の測定であった。

(4) 自己愛傾向及び抑うつにおける自己の変容と自伝的記憶の機能に関する研究

【対象】大学生 110 名。

【手続き】質問紙調査を行った。質問紙は，a.自伝的記憶課題，b.気分の測定，c.抑うつの測定，d.自己愛傾向の測定から構成された。

a.自伝的記憶課題では，ⅰ)最も印象に残っているエピソードの記述とその経験年齢及び望ましさ(7 件法)，ⅱ)最早期記憶年齢，ⅲ)自己概念の変容時期(昔の自分と今の自分の境界)，ⅳ)“昔の自分”で印象的なエピソードの望ましさ(7 件法)と想起の視点，ⅴ)“今の自分”で印象的なエピソードの望ましさと想起の視点について尋ねた。b.気分の評定では DAMS(福井，1997)を，c.抑うつの測定では BDI-Ⅱ，d.自己愛傾向の測定では中山・中谷(2006)の尺度を用いた。

(5) 自己愛的脆弱性と自伝的記憶の自己機能不全について―想起の視点と主観的時間的距離感に着目して―

【対象】株式会社クロス･マーケティングのリサーチ専門データベースにモニターとして登録している一般成人 400 名(男性 208 名，女性 192 名)。

【手続き】Web 上での調査を，株式会社クロス･マーケティングに委託し，実施した。

質問紙の内容は，a.属性(性別，年齢)，b.誇らしかった出来事の想起，c.恥ずかしかった出来事の想起，d.自己愛的脆弱性尺度短縮版(上地･宮下，2009)から構成された。b.とc.に関しては出来事の記述は求めず，以下の項目についてそれぞれ尋ねた。ⅰ)主観的時間的距離感(10 件法)，ⅱ)想起の視点，ⅲ)自己所属感(7 件法)，ⅳ)鮮明度(7 件法)，ⅴ)実際の体験時期(年月)。

(6) 面接における自伝的記憶の語りと抑うつ及び自己愛傾向との関連について

当初は面接調査を実施する予定であったが，実施困難な状況となったため，以下の 2 つの研究を実施することとした。

① 抑うつにおける自伝的記憶の語りと再構成に関する研究

【対象と手続き】面接調査によって抑うつと自伝的記憶の語りを検討した田上(2010)と，Tagami(2008)で大学生 123 名を対象に実施した調査において，それぞれ求めた人生曲線(横軸を時間とし，縦軸を望ましさとした用紙に人生を 1 本の線で表わしてもらう)の記述について分析を行った。加えて，自伝的記憶の語りと自伝的記憶の意味づけとの関連についての検討を計画した。

② 自己愛における自伝的記憶の語りに関する研究

【対象と手続き】自己愛を対象とした面接を報告している事例研究において，どのような語りがみられるか，質的・力動的に明らかにするために，文献検討を行うことを計画した。

４．研究成果

(1) 抑うつと自己愛傾向における自伝的記憶の機能に関する研究

TALE については探索的因子分析(最尤法，プロマックス回転)によって見出された 4 因子(方向づけ機能，自己機能，社会的機能(関係性構築)，社会的機能(助言))を分析に用いることとした。

抑うつとの関連については，自己機能因子との間で正の相関が統計的に有意であった(r=.16，p<.05)。

中山･中谷(2006)の自己愛の尺度は評価過敏性と誇大性の 2 つの下位尺度から構成されるが，評価過敏性に関しては，方向づけ機能，自己機能と正の有意な相関が(r=.20，p<.01，r=.18，p<.01)，誇大性に関しては，方向づけ機能とのみ正の有意な相関が(r=.21，p<.01)それぞれ認められた。

以上より，抑うつと評価過敏性自己愛については自己機能と関連がみられ，抑うつや評価過敏的な自己愛が高いと，自己の連続性や一貫性を確認するために自伝的記憶が用いられやすいことが示唆される。一方誇大性自己愛は自己機能とは関係がみられず，自身の行動を方向づけるために自伝的記憶が用いられやすいことが示された。これらより，自伝的記憶の機能に関しては，抑うつと評価過敏性自己愛には共通性がみられるが，誇大性自己愛とは相違があることがうかがわれる。

(2) 自己愛傾向の違いと自伝的記憶の機能に関する研究

はじめに TALE について，因子構造の妥当性を検討するために確認的因子分析を行ったところ，4 因子構造の適合度が最も高く(GFI=.94，AGFI=.91，RMSEA=.03)，本研究では 4 因子構造で分析を行うこととした。

次に中山･中谷(2006)に基づき，対象者を誇大型自己愛群と過敏型自己愛群に分類し，自伝的記憶に関して比較を行った。TALE に関しては表 1 に示したように，自己機能得点で過敏型が高い傾向が示された。

以上より，自己愛傾向のタイプの違いによっても，自伝的記憶の自己機能に違いがみられることが示唆される。

(3) 抑うつ及び自己愛傾向と自伝的記憶の想起の視点との関連に関する研究

抑うつと想起の視点との関連に関しては，軽症の抑うつでは観察者視点が多くとられ

表 1 自己愛の 2 タイプ間の
自伝的記憶の機能の違い

	TALE			
	方向	自己	関係	助言
過敏型	27.94	13.15	20.67	8.70
[n=33]	(7.33)	(3.29)	(5.02)	(2.96)
誇大型	26.03	11.66	21.34	9.17
[n=35]	(7.31)	(3.41)	(4.12)	(2.44)
t 値	1.08	1.84†	0.61	0.72

†p<.10
注）数値は平均値，( )内は標準偏差

るが，重症になると視野視点がとられる傾向が示された($\chi^2(3)=6.40$, $p<.10$)。一方，自己愛傾向と想起の視点との間には有意な関連は認められなかった($\chi^2(3)=1.76$, *ns*)。先行研究からは，観察者視点での想起は低い自己評価と関連していることが指摘されているが(e.g., Kuyken & Moulds, 2009)，本研究の自己愛傾向の分析からは支持されず，自己愛の測定や検討の仕方について等，見直す必要性が考えられる。

(4) 自己愛傾向及び抑うつにおける自己の変容と自伝的記憶の機能に関する研究

① 抑うつに関して

抑うつの高さは，“昔の自分”で印象的なエピソードの望ましさとは関連がみられないが(r=-.11, *ns*)，“今の自分”で印象的なエピソードの望ましさとは負の有意な相関が認められ(r=-.25, p<.05)，さらに抑うつが高くなると，昔と今を分ける境界が現在からより遠くなることが示された(r=-.21, p<.05)。

② 自己愛傾向に関して

対象者を自己愛に関する尺度得点に基づき，混合型，過敏型，誇大型，低自己愛群の 4 群に分類した。

最も印象に残ったエピソードの内容を分類したところ，混合型では“部活動”に関する内容が著しく多く，望ましいものが多かった。一方，過敏型においては“受験”が最も多く想起されていた。

“昔の自分”と“今の自分”に印象的なエピソードの望ましさについては，抑うつと同様，“昔の自分”では差が認められなかったが，“今の自分”については，過敏型に比べ，混合型，誇大型のエピソードの望ましさが高い傾向が示された($F(3,89)=2.62$, p<.10)。

想起の視点に関して，エピソードの望ましさを変数に加え，自己愛傾向との関連を検討したところ，過敏型自己愛において昔のネガティブなエピソードを想起する場合に一人称的視点を多くとる傾向が示された($\chi^2(3)=6.28$, p<.10；図 1 参照)。

(5) 自己愛傾向における自伝的記憶の自己機能不全について―想起の視点と主観的時間的距離感に着目して―

① 想起の視点について

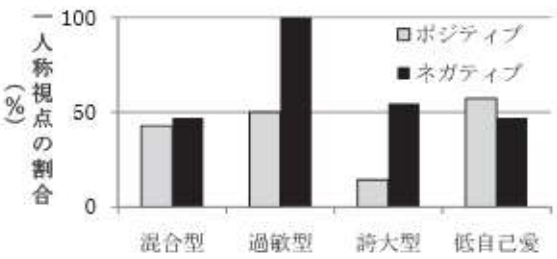

図 1　昔のエピソード想起における視点

自己愛的脆弱性尺度は 4 下位尺度から構成されているが，全ての下位尺度において，それぞれの平均値+1*SD* より高得点であった者を自己愛的脆弱性高群(n=15)，それぞれの平均値-1*SD* より低得点であった者を低群(n=12)とした。誇らしかった出来事の想起においては，視点と自己愛的脆弱性の高低に関連は認められなかったが($\chi^2(1)=2.70$, *ns*)，恥ずかしかった出来事の想起においては，自己愛的脆弱性が高い場合に観察者的視点が多くとられる傾向が示された($\chi^2(1)=3.31$, p<.10)。このことから，著しく自己愛的脆弱性が高い者は，自身にとって脅威となり得るような記憶(たとえば自己愛を傷つけ得る“恥ずかしい”記憶)は，ネガティブな感情を抑制し，距離をとる形で想起されるのではないかということが示唆される。この結果については，日本心理学会第 79 回大会で発表の予定である。

② 主観的時間的距離感について

現在分析を行っているところである。出来事の所属感や鮮明度，発達の違いなども考慮にいれ，分析を進め，早い段階で発表を行う予定である。

(6) 面接における自伝的記憶の語りと抑うつ及び自己愛傾向との関連について

① 抑うつにおける自伝的記憶の語りと再構成に関する研究

質問紙調査による大学生 123 名の人生曲線と抑うつとの関連について検討した結果，抑うつの重篤度で違いがみられたのは，現在及び将来をどのような望ましさで位置づけるかという点と，将来を何歳まで描くかという点であった。すなわち，抑うつが重篤になると，現在や将来を望ましくない側に位置づけて描き，軽度の抑うつに比べると先の年齢まで描かないことが示された。また曲線の形状に関しては，過去から現在までを山型(逆 U 字型)で描く者の抑うつ得点が高いことが示された。

今後は，人生曲線を用いて検討を行った自伝的記憶の語りのデータ(田上，2010)と照らし合わせて，抑うつと自伝的記憶の語りと再構成について分析を進める。加えて，Tagami(2008)の調査で測定した自伝的記憶の機能と人生曲線との関連についても分析を行っていく予定である。これらを通して，

抑うつにおいて自伝的記憶がどのように機能しているのか，質的･力動的に明らかにしていきたい。

② 自己愛における自伝的記憶の語りに関する研究

現在，事例研究を中心に文献を収集し，整理しているところである。自伝的記憶の３つの機能に着目し，語りの表現や内容について，臨床的な特徴を捉えていく予定である。

＜引用文献＞

① Beck, A. T., Steer, R. A., & Brown, G. L.著　小嶋雅代・古川壽亮訳著 (2003). 日本版 BDI-Ⅱ―ベック抑うつ質問票― 日本文化科学社

② Bluck, S. (2003). Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, 11, 113-123.

③ Bluck, S., Alea, N., Habermas, T., & Rubin, D. (2005). A tale of three functions: The self-reported uses of autobiographical memory. *Social Cognition*, 23, 91-117.

④ 福井至 (1997). Depression and Anxiety Mood Scale (DAMS)開発の試み　行動療法研究, 23, 83-93.

⑤ 上地雄一郎･宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性，自己不一致，自尊感情の関連性　パーソナリティ研究, 17, 280-291.

⑥ 川崎直樹･小玉正博 (2010). 自己に対する受容的認知のあり方から見た自己愛と自尊心の相違性　心理学研究, 80, 527-532.

⑦ Kuyken, W., & Moulds, M. L. (2009). Remembering as an observer: How is autobiographical memory retrieval vantage perspective linked to depression? *Memory*, 17, 624-634.

⑧ 中山留美子･中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.

⑨ 野村晴夫 (2008). 自己を語ることと想起すること―心理療法場面を手掛かりとしたその機能連関の探索―　心理学評論, 51, 99-113.

⑩ Rhodewalt, F., & Eddings, S. K. (2002). Narcissus reflects: Memory distortion in response to ego-relevant feedback among high- and low-narcissistic men. *Journal of Research in Personality*, 36, 97-116.

⑪ Tagami, K. (2008). The functions of autobiographical memory and depression. The XXIX International Congress of Psychology, Berlin (Germany).

⑫ 田上恭子 (2010). 自伝的記憶の語りに関する予備的研究　弘前大学教育学部紀要, 104, 121-127.

⑬ Williams, J. M. G., Barnhofer, T., Crane, C., Herman, D., Raes, F., Watkins, E., & Dalgleish, T. (2007). Autobiographical memory specificity and emotional disorder. *Psychological Bulletin*, 133, 122-148.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計６件）

① 田上　恭子(Tagami Kyoko)，大学生の人生曲線と抑うつとの関連(Relationships between characteristics of life curves and depression in university students)，2013年アジアヒューマンサービス学会研究大会(2013 Asian Society of Human Services Congress)，2013年9月13日，Busan(Korea)

② Tagami Kyoko, Two types of narcissism and autobiographical memories of Japanese university students, The 13th European Congress of Psychology, 12 July 2013, Stockholm(Sweden)

③ 田上　恭子，抑うつ及び自己愛傾向における自伝的記憶の機能，日本心理学会第76回大会，2012年9月11日，専修大学（神奈川県・川崎市）

④ 田上　恭子，自己愛傾向における自伝的記憶の特徴について―想起内容と想起の視点に関する探索的研究―，日本心理学会第75回大会，2011年9月17日，日本大学（東京都・世田谷区）

⑤ 田上　恭子，抑うつ及び自己愛傾向と自伝的記憶の想起の視点との関連，北海道心理学会･東北心理学会第11回合同大会，2011年8月21日，北翔大学（北海道・札幌市）

⑥ Tagami Kyoko, Are the visual perspective in autobiographical memory, related to non-clinical depression?, The 12th European Congress of Psychology, 5 July 2011, Istanbul (Turkey)

６．研究組織

(1)研究代表者

田上　恭子（TAGAMI, Kyoko）

愛知県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：80361004